

# 先輩から後輩へ、親身なアドバイスが生きる学習支援

## ～龍谷大学ライティングセンターの取組～

岩本 太郎

(龍谷大学 教学副部長)

### 一 はじめに

龍谷大学瀬田学舎には理工学部、社会学部、国際文化学部というそれぞれ特徴のある三学部が設置されている。ここに、学部共通の学習支援のためライティングセンターが設置されたのは二〇〇六年一〇月であった。以来一年を経過し、徐々に実績を積み上げつつある。

大学全入時代を目前にして、学生の文章力の全般的低下が問題になっている。文章に話し言葉や仲間言葉が混じったり、書き出しと結論が食い違っていたり、句読点がなかったりするのでは、まともなレポートが書けない。文書を作

成することは学びの基礎であり、基本的な文章力をまず持たせる必要がある。それと同時に、感想を主とした作文から論理展開を軸とした論文へ、内容も文書のスタイルも変化する。この変化にうまく適応できない学生がいる。綿密な指導を受ける高等学校の教育から一転、自立して自ら課題に取り組むという大学の学び方になじめずにどうしているか迷っている学生に対し、経験を踏まえた先輩からのアドバイスが有効に働くのではないか。単に文書のスタイルの問題に留まらず、課題を分析し、材料を集め、論旨に沿って整理し、記述するという一連の思考過程を学生の側に立てアドバイスし身につけさせることが、入学したばかりの

大学生には必要である。

ライティングセンターはこの問題に対応し、親身なアドバイスで自立を促し、学生の持つ潜在的な力を引き出し、それを伸ばす学習支援を、先輩であるチューターが行う試みとして設立された。

### 二 センターの役割

大学に入ったばかりの学生は小論文や報告書、申請書、卒業論文等の公的な文書を書いた経験がほとんどない。そのため、はやりの言い方や仲間言葉が混じっていたり、句点がなかったり、「ですます」調と「である」調が混じっていたり、長い文書では首尾一貫せず論旨が通らなかったりする。高校での学力不足を補うリメディアル教育もさることながら、むしろ大学で必要な文章、いわゆる日本語アカデミック・ライティングができるよう指導することに大きな意義がある。

大学での勉学の仕方は高校と異なり、授業時間以外に自分で勉強に取り組む時間が必要で、それを前提に授業が組まれている。レポート作成や卒業論文の作成その他、自力で取り組まなければならない作業が多々ある。授業内容の

理解が不十分なときや、取り掛かってみたがどうもうまく進まないときにだれかが相談に乗ってくれば大いに助かる。レポートでは、課題に対し自分のテーマの設定がうまくできなかったり、図書館で参考図書を探す方法がわからなかったり、言いたいことがうまく表現できなかったりする。文書の書き方の良し悪しもさることながら、書く前の準備段階での作業に慣れていない。ライティングセンターは、文章力向上の指導に留まらず、大学生としての論理力や思考力を高めるための学習支援を目的としている。文書の添削指導に終始せず、文書を作り出す作業を全般的に指導する狙いがある。

授業とのかかわりについては、現状は授業科目との連携やその一部を分担することを想定していない。ライティングセンターが授業の一部を肩代わりすれば、添削など大量の作業が発生し、個人指導の良さが失われる恐れがある。三学部の性格がかなり異なっていることから、入学初年度の導入教育については、それぞれの学部で必要とする内容について指導を行っており、共通科目として「大学生入門」も設定されている。しかし、授業では習っている、いざ自分が取り組まなければならないことになったとき、どこからどう取り組めばいいのかわからない学生がいる。

このような学生には教員にも相談しにくい状況がある。授業で習ったはずのことが十分身についておらず、授業についていくことに困難を感じている学生を救済することに意義がある。このような学生の思考パターンを軌道修正して自信を持たせることがセンターの役割ではないかと思う。相談に来た学生と真剣に向き合い、困っている状況を聞きだして問題点を把握し、適切なアドバイスを考えてあげる。学生に気づかせ、自主的に事が行われるよう誘導する。したがって、個々の相談には時間がかかり、大勢の学生を対象とする授業とは一線を画すことになる。

相談に来る学生の中には、自力で課題を達成できるが、さらに優れた文章を作成したい向上心の高い学生も少なからず存在する。もちろんこのような学生に対しても、いくつかの改善点を指摘し、指導を行っている。

### 三 指導者の構成と実施体制

ライティングセンターには一名のアドバイザーと九名のチューターが所属している。アドバイザーは文学部の非常勤講師をしている人で、センターを運営し、チューターをまとめる指導的立場にある。チューターは修士四名、博士

四名、研究生／非常勤講師一名である。大学院生をチューターとして採用しているのは、学生と年齢が近くて相談しやすいこともあるが、本学の学部の授業の経験者として授業の背景等を知っていて、血の通った指導ができるのではないかと期待からである。課題で求められていることが何であるかを知っていれば、当を得た文書を作ることができる。

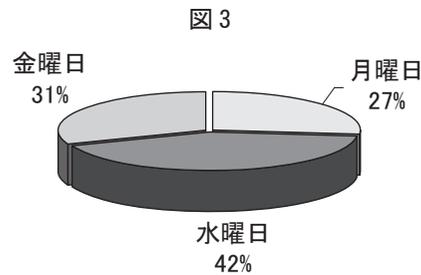
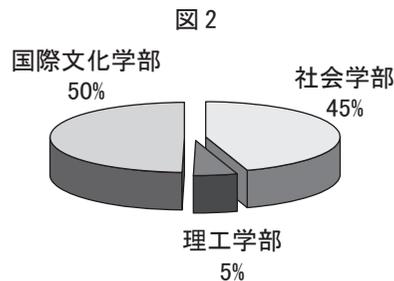
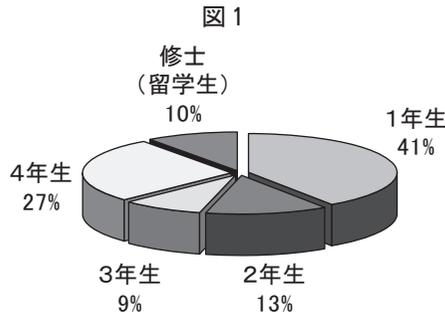
ライティングセンターは、月曜、水曜、金曜の週三日、一時から一六時に開設し、チューター二名ないし三名が学生の相談に対応している。設置場所は、学生が来やすいようにキャンパスの中心にある一号館一階のセルフラーニングスペースにある。ここは学部の専門科目の相談を受けるチュータールームも兼ねている。設置場所については図書館の中というのが一般的かもしれない。しかし図書館ではゲートもあり、大きな声を出すことに問題もあるので、扉一枚で入れ気兼ねなくしゃべることが出来る現在の場所はむしろ好ましい。学生への呼びかけを積極的に行っており、立て看板を置いたり、食堂のテーブルに広告柱を置いたりしている。また、毎回その日の報告をメールで流し、チューター間の情報交換を行っている。チューターは皆まじめで向上心が強く仲が良い。学部の異なるチューターが

協働することによって、チューター自身も刺激を受け視野が広がるメリットもある。

センターの運営は教学副部長と学科主任を中心とするライティングセンター運営委員会が責任を持ち、全体をコントロールしている。またチューター会議が二ヶ月に一回開かれ、利用状況の把握や運用上の課題の検討が行われている。図書館や、コンピュータを用いた検索に関連して、情報メディア部門との連携も行っている。

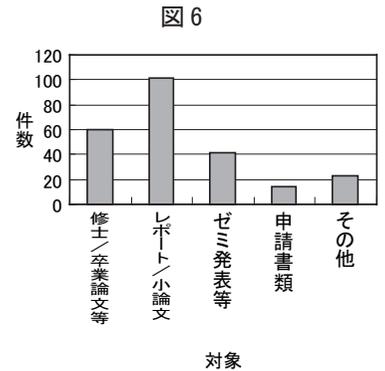
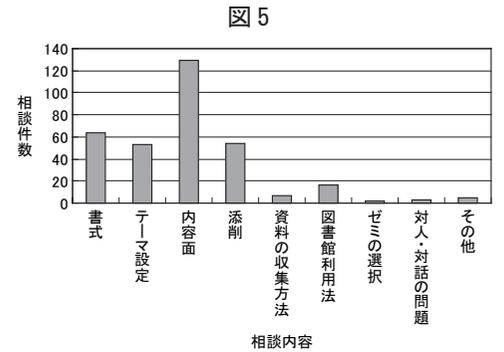
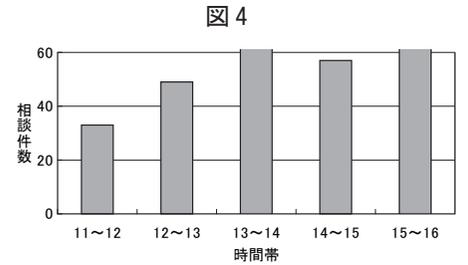
### 四 利用状況

利用者数の推移は、昨年度後期の延べ相談者数が七六名であったのに対し、本年度四月～七月の合計は一七八名と大幅増加した。学期の後半になると相談件数は増加し、一〇〇名を越える月もあった。その後、現在の場所に移動し、九月から一二月中旬までの三ヶ月



で延べ二二一名である。

二〇〇七年度の利用状況調査により分析をしてみよう。図1は学年別利用者の比率である。一年生が多く、学年が上がるにしたがって利用者が減少するのは予想通りである。四年生が多いのは卒業研究が影響していると思われる。図2は学部別の利用者数比率であるが、理工学部が少ない。これは技術文書が定型の文書であり、その書き方を授業の中で教えていたり、技術内容の相談を受ける理工学部のチューター制度の方を利用したりしているためであると思われる。



学部特性が現れている。曜日については図3に示すように水曜が多く、時間帯では図4に示すように昼過ぎが多いが、一六時以降も開けてほしいという要望がある。

図5に示すように、相談内容では、書く技術よりも書く内容の相談が多い。テーマの設定や資料の収集の仕方になじめない点が見られる。相談の対象としては、図6に示すように、予想通りレポートや小論文が多いが卒業論文やゼミ

発表も少なからずある。本来は所属ゼミで対処すべきであるが、指導の先生には気安く相談しにくい場合もあるのである。むしろ、こういうケースこそライティングセンターが対処すべきものと思う。そのほか、奨学金の応募書類や手紙など対象は広い範囲にわたる。外国人留学生の場合は和文の添削を依頼されることが多い。

## 五 今後の課題

チューターによって指導が異なることを少なくし、後継者を育てるため、これまでの経験を踏まえた指導マニュアルの作成、文書作成のフロー図等の製作を推進している。また、資料図書の充実や外部講師による講演会も継続したい。共通のきまりごとなどについては学生を集めて集団指導することが効果的であり、チューター自身が講師となるミニ講演会や複数のチューターが集団指導を行うワークショップを考えたい。代表的な失敗例やよく見られる添削例等も資料化したい。

申請書や応募書類については可否の責任を負うことはできないが、指導へのフィードバック情報として、結果を把握する方法を考える必要がある。チューターの人材や後継者を育成することも大切で、チューターの指導または相互研修も必要と考えられる。センターは学生が少ない休業期間中は開いていないが、センターの開いている日や時間帯について拡大を求める声もあり、状況を見て対応していきたい。

本学のライティングセンターは発足後一年を経過したが、

まだまだ発展の途上にある。経験を積み上げて、より効果的な学習支援ができることを目指していきたい。